

グローバル世界における〈場所〉と創発の社会学

——グローバルな空間編制とアジアの地域住民組織——

東北大学大学院文学研究科 人間科学専攻
社会学専攻分野 博士後期課程
伊藤 嘉高

1. 本論の課題と結論

社会学では、現代のグローバル社会の特徴として、「再帰的近代」、「第二の近代」、「リキッド・モダニティ」などと形容されさまざまに語られている。そこで共通の前提とされているのは、近代の近代を生きる私たちは全体社会のもつ象徴界の虚構を喪失し、時間的にも空間的にも流動的な世界を生きているということである。

その帰結は、現実界にむき出しにされた個であり、私たちは新たな社会構想を描けぬまま、ネオ・リベラリズムの秩序論理に疑問を抱きつつも、何かを語ろうとすれば表象が孕む暴力性に苛まれる。いずれにせよ、固定された概念、思想、イデオロギーはなんであれ、私たちの生活の「リアリティ」からも理想郷からもかけ離れたものとなってしまったのである。

しかし、そうであるからといって、これらの概念がまったく無効、無用なものとして遺棄されたわけではない。問題は、そうした概念に対して、私たちの日常性に耐える強度を持ちうるのかという視点から再審をはかり、その再生ないし埋葬の可能性を探り、新たな「リアリティ」とともに「実証」科学の構想へとつなげることである。本論はその一つの試みである。

本論では、以上の現代社会の様態を「空間」の視点から捉え返し、新たな「社会的リアリティ」としての〈場所〉の創発に目を向け、〈場所〉の創発社会学を構想するとともに、環太平洋アジアの地域社会のフィールド調査からその論の妥当性を検討する。

具体的な論証過程は後述するとして、本論からは以下の知見が結論される。すなわち、経済文化のグローバル化による新たな空間秩序の論理にローカル化ないし地理的にローカルな〈場所〉の差異の自律をもって反抗することは結局のところグローバル化と同じ論理の裏面にすぎず、世界の矛盾を深化させるだけであること。これに対して本論の視点から導かれる戦略は、グローバル化の矛盾に対処するためには、支配的な秩序論理に応答する責任を持ちながらも、グローバル化の空間編制のネットワーク性に目を向け、「全体化」の思考に囚われることなく脱領土的な〈場所〉の論理（ネットワークの離接）を多次的に創発させ、いくつもの秩序を世界に並立させ自律運動化させることである。そして、この複数化の戦略の実証科学として、還元論／相対主義を超えた〈場所〉の創発社会学の方法論的枠組みが有用なのである。こうして、虚無や拝金、権威に墮することのない人間自由のためのレギュレーションとガバナンスをスケール／ネットワークの両輪によって構想することが可能となる。

2. 本論の全体の構成

前文	3
目次	15
凡例	19
第1部 グローバル世界における〈場所〉創発の社会学 ——〈場所〉の多次的創発に向けて——	
序論	実証的社会科学の脱近代的再定式化に向けて 21 ——〈場所〉の創発社会学の基本前提——
1	緒論——近代的構制の融解
2	自然科学の二つの次元——実証主義／構築主義の境界を越える
3	社会科学の存立
4	結論
第I章	グローバル化とシステム論社会学の展開 31 ——グローバル／ローカルを越境する〈場所〉——
1	緒論——グローバル化・生氣論・複雑性
2	システム論社会学と複雑性理論の展開
3	カオスと複雑性——秩序／無秩序の二分法を超える「实在性」
4	グローバル複雑系の社会学
5	結論——グローバル／ローカルを越境する〈場所〉
第II章	〈場所〉と創発の社会学の方法論 47 ——ネットワークとスケールの並立による〈場所〉の多次元性——
1	緒論——グローバル複雑系社会学の問題
2	社会学的創発理論小史
3	第三世代システム論とシンボリック相互作用論
4	「心の哲学」における非還元論的個人主義創発論
5	個人／集合主義、批判的实在論の検討
6	第三世代システム論による創発理論の骨格
7	〈場所〉の創発社会学の方法論的枠組み
8	結論——〈場所〉の無根拠化による根拠化
補論	制度儀礼から非制度儀礼による〈場所〉の創発へ 89 ——メアリー・ダグラス象徴人類学及び後期ジンメルの批判的検討——
1	緒論
2	境界論の本義
3	ダグラスの儀礼擁護と創発の社会学との異同
4	非制度的創発としての儀礼世界へ——リスク論の視点から
5	モノド・価値・生成——後期ジンメルと「生活の社会学」
6	結論——制度儀礼の裂開と新たな再帰性
第2部 日本の地域社会の変容 ——〈場所〉創発の政治学——	
第III章	地域住民組織の制度論的転回 125 ——町内会による〈場所〉の制度的構造化の限界——
1	緒論——町内会論と創発の社会学
2	都市空間にみる〈場所〉の変容とコミュニティ
3	町内会の構造——創発力学の動因

4	町内会の機能——創発力学の媒介項	
5	町内会長とその代表性（representativeness）	
6	結 論——フレキシブルな創発の論理に向けて	
第IV章	言説による〈場所〉の交響的創発	171
	——開発・「まちづくり」・公共私——	
1	緒 論	
2	開発レトリックと社会空間の変容	
3	〈まちづくり〉なる言説がもつ創発メカニズム	
4	〈まちづくり〉のレトリックと公／私の動態性	
5	結 論——大文字の公共性を離れた共同の創発	
第V章	表象／象徴による〈場所〉の協同的創発	193
	——制度／非制度の境界——	
1	緒 論——〈場所〉の表象と共同性	
2	事例対象地の歴史的背景	
3	〈場所〉をめぐる制度的活動	
4	〈場所〉をめぐる非制度的活動	
5	結 論——いくつもの〈場所〉をつなぐ連帯に向けて	
	第3部 アジアにおける〈場所〉の動態	
	——開発・グローバル化・ポストコロニアリズム——	
第VI章	協同的創発と交響的創発による〈場所〉のせめぎあい	209
	——バリ島における「開発と文化」——	
1	緒 論——〈場所〉と「開発と文化」	
2	〈場所〉の開発と〈場所〉の文化——内発と外発の二分法を超えて	
3	コロニアリズムによる〈場所〉の創発	
4	「観光のまなざし」による〈場所〉の創発	
5	せめぎあう〈場所〉の政治学——ポスト・スハルト期の分権化の影響	
6	小 括——〈場所〉の文化の「開発」とは？	
第VII章	ポスト開発主義期における〈場所〉の制度性の変容	221
	——バリ島南部観光開発地域の事例から——	
1	緒 論——バリ島における地域住民組織	
2	事例対象地の歴史地理	
3	黎明期の地域開発——デサと〈場所〉	
4	80年代不況のインパクト——〈場所〉の創発からの離床と復帰	
5	変容する観光開発と地域社会のいま——〈場所〉のズレ	
6	結 論——変わらない〈場所〉	
	資料 I～III	
第VIII章	グローバル化の境界と〈場所〉の創発	273
	——マカオの地域住民組織「街坊会」の場所性——	
1	緒 論——マカオの境界性	
2	グローバル・ネットワークとマカオ——デュアリティの由縁	
3	マカオのコロニアル化	
4	街坊の基層をなす場所性	
5	街坊会の成立と新たな場所の〈創発〉	
6	返還を前にした街坊会——連合総会の設立による〈場所〉の規定	
7	返還後の街坊会の位置	
8	結 論	

——越境するローカル・レギュラシオンの創発——

- 1 緒論——ここまでの本論の議論を振り返って
- 2 モダンかポストモダンか——グローバル資本主義の分析軸
- 3 スラムの惑星
- 4 幕間——ジャカルタの場合
- 5 「近代」とメタ・ナラティブの方法論的限界
- 6 新自由主義に対する規制とレギュラシオン
- 7 フラクタル空間によるレギュラシオン
- 8 グローバル世界の経済地理とレギュラシオン
- 9 結論——脱領域的な場所の政治学に向けて

文献一覧 317

初出一覧 334

3. 各論

3.1 第1部「グローバル世界における〈場所〉創発の社会学」

第1部では、〈場所〉の創発社会学の方法論的枠組みが提示される。ただし、これは第1部が本論の理論篇をなすということではない。現実のさまざまな歴史地理の基底にある「諸関係」を捉えるための概念装置として〈場所〉の創発社会学が提示されるのであり、本論第2部以下で試みられるように、経験的研究においてもその諸関係を捉えていく上で有用なものである（具体／抽象の往還）。

■序論 実証的社会科学の脱近代的再定式化に向けて——〈場所〉の創発社会学の基本前提

先に述べたように、新自由主義のレキシコンとその論理に染まらず、グローバル化の空間編制を視野に入れた新たな共同態ないし連帯の生成に資するような新たな「実証」科学が求められている。序論では、従来の近代社会理論における実証主義／解釈学の二分法の問題を析出することで、この新たな「実証」科学の条件が提示される。すなわち、一方の実証主義は、超越的な客体を持ち出しその因果関係を同定するにとどまり、時間空間的に普遍的な「かたい客体」が人間のカテゴリーの運命を規定するとされてきた。そして、他方の解釈学ないし構築主義は、内在的な主体による構築を同定するにとどまってきた。客体の「やわらかい次元」（自然、神、機械、芸術）が主体の「かたい部分」によって構築されるとされてきたのである（「社会的要因」）。

したがって、いずれの立場も近代的構制を再生産するものでしかなかった。ところが、実際のところ、客体は超越と内在の混在、すなわち「準客体」であり、主体は、一定の時間空間において超越的な「準主体」なのである。既存の近代的な制度科学は、この準主体と準客体のハイブリッドなネットワーク（グローバルなプロセス）を閉塞させてしまうという点で「有害」なのである。ここから非近代的な世界構制（ブルーノ・ラトゥール）によって、普遍／特殊、主体／客体、ひいては空間／場所なる二項対立を越える必要性が指摘される。そして、非近代的構制によって、古い（アルカイックな）ものと新しいものと

が結ばれ、新しい接続のなかで歴史は「回復」される。世俗に神々を連れ帰ることで、非近代が近代のファウスト的主体を滅殺するのだ。ただし、プレ・モダン的な動員が単純な再生産をもたらすのに対して、非近代的な動員はネットワークの拡大再生産を導くものとなる。

■I章 グローバル化とシステム論社会学の展開—グローバル／ローカルを越境する〈場所〉

続く第I章では、この新たな実践の可能性をローカルな反復行動の内に見いだすことができることがグローバル複雑系の社会学を援用するかたちで論じられる。とはいえ、この実践は、「世界の二極分化を押し進めるグローバル化に全面的に抵抗するためのローカルな地歩」などといった大義とは無縁である。実のところ、ローカル化の深化は、グローバル化と同じ論理に従っているにすぎないのであり、二つはヤヌスの顔なのである。グローバル化とローカル化は「共進化」の関係にある。そして、この共進化の流れをとめることはできない。したがって、重要なことはこの共進化の関係性を変えていくメカニズムの探究である。そして第I章からは、ローカルなるものは私たちの実践の「根」をなすものでありながらも、オルタナティブなグローバル秩序を創発させる開かれた〈場所〉の政治学に向かうべきであることが明らかになる。ここで〈場所〉はもはや領域的に閉じた地理的な地域に回収されるものではなくなる。つまり、私たちはローカルな〈場所〉のコンテクストを生きるとともに、他のローカルな〈場所〉コンテクストとつながり合うことで、グローバル化する世界の複合的な危機と機会とに応答し、新たなカオス的秩序をグローバルなレベルで創発させることができるのである。

しかし、グローバル複雑系社会学には一つの問題がある。つまりその枠組みからは、いかにしてローカルな相互作用の反復が生み出され、種々の空間スケールにおけるプロセスと接続されるのか、そして、それらのメカニズムをいかに記述することができるのか、が等閑視されているのだ。このことを根本的に問い直されなければならない。ここで重要になるのが「創発」なる概念である。

■II章 〈場所〉と創発の社会学の方法論—ネットワークとスケールの並立による〈場所〉の多次元性

第II章では、グローバル複雑系社会学の限界を越える第三世代システム論（複雑適応系）に依拠した〈場所〉の存立と創発の社会学の方法論的枠組みを提示することで、〈場所〉の創発の論理が描出される。ここで〈場所〉の存立は、「構造」「協同的創発」「交響的創発」「相互作用」「アクター」に存在論的に区別されることになる（以下の知見を組み入れた最終的な図式は、図1）。そして、ここから、連帯の論理が創発のサイクルにあることがまず明らかになる。ちなみにここでの要点は、これらの創発次元の存在論的地位の内実である。創発を物象化してはならない。本論では、「心の哲学」のジェリー・フォードの議論にしたがい「多重実現可能性」と「粗大選言」の視点から、創発が方法論的個人主義的に説明しながらも個人に還元されない実在性を有することをみた。これは、伝統と記憶の「反復」過程の重要性を示す「根拠」でもある。

ただし、第三世代システム論、および既存の創発社会学にも大きな問題がある。すなわち、こうした議論では、ある種の社会組成的な全体性（統治心性）が自明のもとして前提にされてしまっている。ローカルなものであれ、ナショナルなものであれ、グローバルな

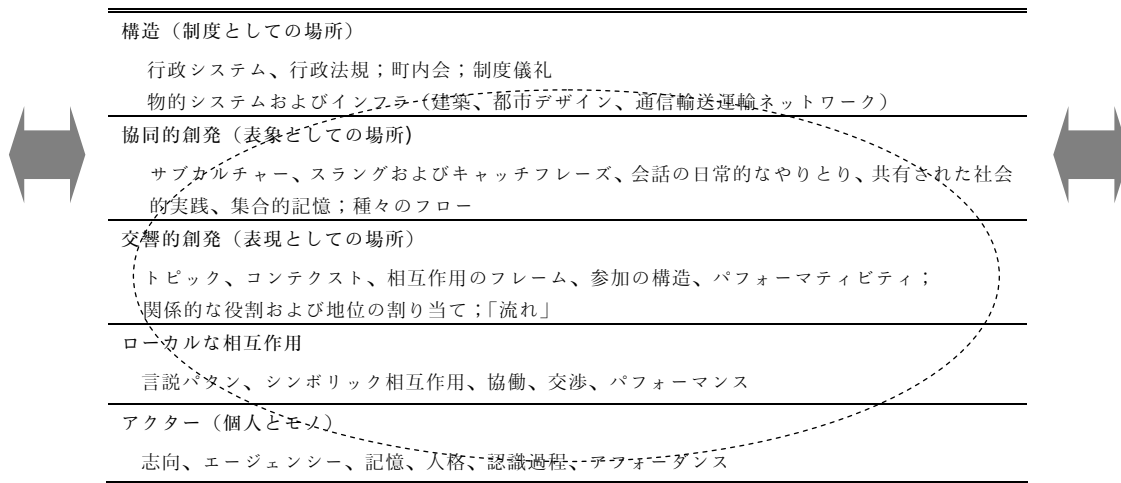


図 2.5 グローバル時代の〈場所〉の存立構造における「創発の輪」

ものであれ、そうした全体性など存在しない。

したがって、第二世代システム論から導かれる「カオスの縁」ないし「フラクタル空間」のアイディアと、相互作用論の伝統を受け継いだ複雑適応系に根ざした第三世代システム論とを節合させることが求められる。そして、この作業から、グローバル世界における脱スケールの連帯を実現させる〈場所〉の創発の条件が生まれてくる。それは、「差異の空間」こそが創発の条件になるということだ。ただし、この「差異の空間」は、脱構築主義者や構築主義者の主張する「差異の政治学」とは異なるものである。つまり、創発のための「差異の空間」は「媒介の空間」なのだ。全体性を志向する理論（ガバナンスにせよレギュレーションにせよ）は、この媒介空間の可能性を捉えることができない。

■補論 制度儀礼から非制度儀礼による〈場所〉の創発へ

—メアリー・ダグラス象徴人類学及び後期ジンメル批判的検討

また、第1部補論では、本論の創発理論を従来の全体性を志向する理論と比較することで、その「固有性」を浮かび上がらせ、本論の課題にとって〈場所〉の創発社会学の枠組みが必然的に要請されることが示される。具体的にはメアリー・ダグラスの象徴人類学をアイロニカルに批判することで、制度から非制度への創発力学の変容をみるとともに、非制度的創発力学をめぐる理論的考察としてカントの判断力批判、ジンメルの「生の社会学」、そしてモナドロジーの文脈から展開する。この考察からは、グローバルな無差異のフローを、「生」に備わる差異の「流れ」に転換するという非近代の方途が浮かび上がる。

3.2 第2部「日本の地域社会の変容—〈場所〉創発の政治学」

第1部において〈場所〉の非制度化／脱スケール化という視座が得られた一方で、とりわけアジア社会においては、制度的／スケールの表象空間が支配的である。とはいえ、もちろん具体的な創発のメカニズムに焦点を当ててみれば、そうした制度的なものが全面的に悪だとはいえない。そこで、事例研究においてまず取り組むべきことは、現実の多様なアクタンからなる制度的創発／拘束と非制度的創発／拘束とによる〈場所〉の政治学分析である。第2部では仙台市内の地域空間形成を取り上げこの課題に取り組まれる。

■III章 地域住民組織の制度論的転回—町内会による〈場所〉の制度的構造化の限界

まず、第 III 章では、現在の地域生活空間で旧来型の構造を保持している町内会の制度的変容をみた。この作業は、町内会といったアジアの既存の地域住民組織が新たな創発秩序に資することができるのか、という問いに答えるための前段をなす。結論的には、地域社会学者がさまざまなかたちで主張してきたように、旧来の町内会は制度的に創発の輪を回転させる原理を備えてはいるものの、それはやはりある種の全体性を前提にしており（たとえば越智の「親睦と分担」原理）、その全体性が行政的な論理によって外から付与されていることが明らかとなる。それゆえ町内会が構造次元において〈場所〉の創発のサイクルを生み出す反復原理とはもはやなりえない。

■IV章 言説による〈場所〉の交響的創発—開発・「まちづくり」・公共私

■V章 表象／象徴による〈場所〉の協同的創発—制度／非制度の境界

制度的な創発といっても、構造があれば自動的に生まれるわけではない。表象や言説といった要素は、創発の所産であると同時に創発の媒体でもある。実際には、多様なアクターがこの表象や言説を利用して、秩序化をはかろうとしているのである。続く、第 IV 章では仙台市長町地区、V 章では仙台市柳生地区を対象に、この創発の政治学を具体的に分析している。そこから導かれる実践的課題は、根本的な空間認識の転換である。町内会が領域的な代表性を担保する限りその再生はありえない、ということである。領域的かつ固定的な入れ子構造が成立していた時代は、町内会はその一つの入れ子として媒介（共同）の役割を果たし得たが、グローバル化（ネットワーク化）とともに、空間が領域的な入れ子構造から運動的なフラクタル構造へと変容することで、町内会は行き場を失っているのだ。

行政の末端になるか、あるいは自らもネットワークのなかに進んで組み込まれていくか、制度的に考えた場合、町内会はこのどちらかの選択肢を選ばなければならない。領域的思考をする者は、町内会の領域的な近さに意義を見いだして、前者を採るかもしれないが、筆者の創発社会学の立場では後者になる。なぜなら、制度化された公私が前提とされてはならず、あくまで〈場所〉の共同態から公私が生まれるという原理を保持しなければならないからだ。そしてこれはこれまでの地域社会学によって示されてきた町内会の非近代的な性格とも合致するのである。

3.3 第 3 部「アジアにおける〈場所〉の動態—開発・グローバル化・ポストコロナリズム」

ローカルとグローバルをスケールの的に区分する思考がリアリティを失いつつあるなか、本論の分析も一地域に留まることは許されない。あるいはローカルとグローバルのスケールの的な区分の消失などというのはひとり先進国の消費主義のなせる技にすぎないのはいか、という疑念もある。もしそうであるならば、グローバルとローカルをやはりきちんと区分して、ローカルなものを砦としてグローバル化に対抗していかなければならないだろう。そこで第 3 部では、グローバル化の横軸の創発に向けて（つまりグローバル化の重層的非決定に向けて）環太平洋アジア社会に目が向けられる。本論で具体的にとりあげるのは、インドネシアのバリ島と、マカオである。

■VI章 協同的創発と交響的創発による〈場所〉のせめぎあい—バリ島における「開発と文化」

■VII章 ポスト開発主義期における〈場所〉の制度性の変容—バリ島南部観光開発地域の事例から

まず、第VI、VII章でみるバリ島の事例からはグローバル・ツーリズムをはじめとしたグローバルなプロセスが地域「社会」と〈場所〉の存立構造とその創発メカニズムに与えるインパクトをみた。バリ島を事例にして創発社会学の視点から析出されるのは、やはり創発をめぐる政治学であり、ミドルクラスの近代主義的言説と、ローカルな人びとのヴァナキュラーな実践とがせめぎあっている事態であり、ヴァナキュラーなものの重要性である。とはいえ、ヴァナキュラーなものを本質視して、内に閉じこもることに希望は見いだせない。ヴァナキュラーな知や実践もまた離床化させグローバルなネットワークに接続していかないことには、グローバル空間の政治学のなかで生き残ることは難しいからだ。commonsや地域通貨を伝統的、閉鎖的なかたちで実現しようとする反グローバリズム運動は、その言説自体には創発空間の政治学のなかで一定の意味をもちうるが、実際的な戦略としては有効ではない。

■VIII章 グローバル化の境界と〈場所〉の創発—マカオの地域住民組織「街坊会」の場所性

次に取り上げる、マカオは、グローバル時代の〈場所〉性を考える際にもっとも適した対象である。なぜなら、マカオは有史以来一貫して、〈中心性と周縁性〉、〈同と他〉の間で交差し相矛盾した複雑な関係性のなかで自らを定位しようとしてきたからである。この点にこそ、グローバル時代のフラクタルな〈場所〉の創発社会学がマカオを事例として取り上げることの意義がある。〈場所〉はもはや純然たる「思索の故郷」ではない。〈場所〉の意味づけ自体が、グローバル・ネットワークのなかでパフォーマティブに形成されていくのであり、ローカルな人びとの生活もこのプロセスと無縁ではない。

本章では、中国共産党の影響を色濃く受けながら展開する地域住民組織、街坊会を取り上げ、この力学を描写した。そして、ここからは、やはりグローバル／ローカルの相互浸透のなかで、反グローバリズムの陥穽に陥らないためにも柔軟な〈場所〉の政治が必要であることが結論される。

*

以上の事例研究を踏まえ、最後に、冒頭の問いへと立ち返る。つまり、ネオ・リベラリズムとポスト・パノプティコンが我々の生に深く入り込んだとき、人間の自由と解放はどうなるのか、という問いであり、それらに対抗する戦略はいかなるものであるのか、という問いである。つまり、いかにローカル云々といっても脱領土的なグローバルな資本主義の流動性に対しては無力ではないか、という問いである。さらにいえば、多国籍企業の国際分業に由縁する世界の貧困や不平等の拡大に応答していくためには、フラクタル空間に内在するカオス秩序の創発によるレギュレーションのグローバルな可能性を追求するとともに、ローカルな複雑適応系から創発する何らかのマクロ・レベルのレジームも必要ではないのか、という問いである。

■終章 グローバルな貧困とローカル・レギュレーション—越境するローカル・レギュレーションの創発

終章では、この二つの創発の弁証法の問題に焦点が当てられる。まずマイク・デイヴィスのグローバル・スラム論の検討から始め、ジャカルタの事例と照らし合わせることで、

デイヴィスの告発が一定のリアリティを有していることを確認する。しかし、デイヴィスはグローバル化の負の側面ばかりに「光」を当て近代主義的枠組みで論じるために、反グローバル化への道しか残されていないことになってしまう。しかし、東欧の崩壊が示しているように、そして、本論の各事例が示しているとおりに、グローバルとローカルの二項対立を前提とした反グローバル化の戦略は間違っている。では、どうしたらいいのか。

そこで、経済のグローバル化に対する従来のグローバル・ガバナンス論をまずは検討する。しかし、この検討から明らかになるのは、いずれのガバナンス論もスケールと領域を絶対視しており、本論で見てきたようなフロー、流動体、ネットワークとしての経済のグローバル化が、そのなかに収まりきることはありそうになく、むしろ、さらなる不平等と貧困とをもたらすことにもなりかねないという事態である。

ここで注目されるのが、ジョン・アーリらの立場に近い近年の経済地理学者（マッシー、スリフト、アミンら）による一連の文化的レギュレーション論である。これらの議論からフラクタル空間の脱スケールのレギュレーションの可能性が浮かび上がる。そして、このレギュレーション論と、筆者の〈場所〉の創発社会学とを融合させることで、グローバル化に乗りながらも、ネオ・リベラリズムの「自由、リベラリズム、規制緩和のレキシコン」をレギュレートしつつ私たちの真の自由と解放を実現する道筋を今後の可能性として示し、本論の結論とした。